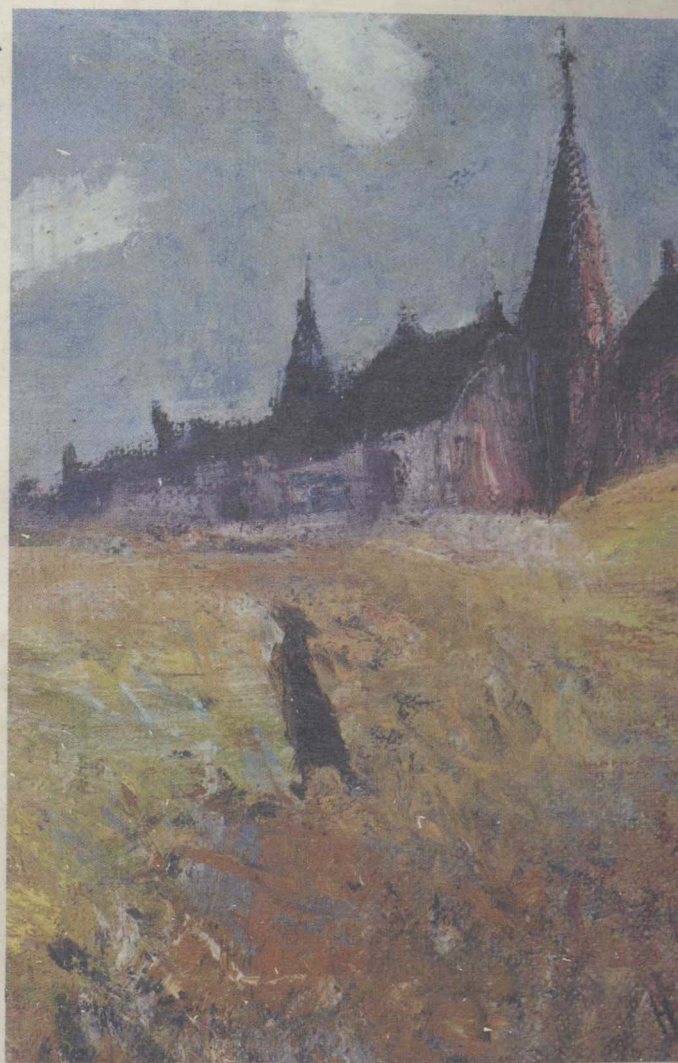


平木国夫
青空と修道院



創林社

平木国夫（ひらき・くにお）

大正13年8月6日石川県七尾市若林町生まれ。
昭和21年3月千葉工業大学中退。日本航空機
輸送(株)運輸部長を経て、現在著述業。『人
間像』同人。

著書=「空気の階段を登れ」「イカロスたちの
夜明け」朝日新聞社「暁の空にはばたく」読
売新聞社「さい果ての空に生きる」酣燈社
「つれないの翼」「つばさの人」泰流社
現住所=横浜市鶴見区下末吉6-25-22

青空と修道院

一九七九年五月三十一日初版発行

定価二二〇〇円

著者 平木国夫

発行者 宮西忠正

発行所 (株)創林社

〒111 東京都千代田区三崎町二の二二の二

電話東京二六五―八〇七七

振替東京〇―二六五四五

光明印刷十須藤印刷 文信社製本

KUNIO HIRAKI

0093-0106-4281



青空と修道院

平木国夫

創林社

目次

青空と修道院 5

第一章 シーソー

第二章 きずな

春の終り 153

装画
小松
久子

青空と修道院

ぼくは無気力で怠惰なサラリーマンである。ぼくはその事実を、会社の人事考課表や、同僚の眼や、そしてまた妻の歯ざしりよりもっと明確に自認している。

人事考課表の総合評価は「良」である。「良」という字はちょっと体裁はいいけれど、その上には「秀」と「優」とが澄ましこんでいるし、下には「可」と「不可」とがひかえているのだから、いわばもっとも平凡な社員の典型といえるだろう。その証拠に、千人を上まわる全社員の六十パーセントがぼくと同類項であり、二十五パーセントが「秀」と「優」で、「可」が十二パーセント、その残りの三パーセントというほんの少数が「不可」で、諭示解雇の一步手前をさまよっている。不幸にして、人事課の一員であるぼくに与えられた仕事の一部が、全社員の考課表を集めて統計をとり円型グラフを作成することであった。以上に示したパーセンテ

ージは、だから「良」であるぼくの手によって調べ上げられた結果である。

人事課員三十一名のうち、「良」はわずか二名で、「可」や「不可」はひとりもいなかった。

ぼくは上司の眼が狂っていないのになかば満足し、なかば失望した。そしてぼくは、いよいよ「良」的サラリーマンの枠に安住して行く自分を予感した。「秀」や「優」になりたい欲望もな
くはないけれど、そんな才能も今のところはないし、努力するだけの気力も持ち合わせてい
ないのである。かといって、人員整理でもあったとき真先に対象にのぼるような「可」や「不可」
のレッテルもはられたくない。要するに、「良」だけは維持したいのである。

いっぼう結婚三年になる妻は、

「あなたがこんなに怠けもので、なにも出来ない人だなんて、想像もしなかったわ」

と何度くりかえしたか知れない。今ではあきらめて、何もいわなくなった。そして無言のレ
ジスタンスを示すかのように、一年前から、結婚直前まで勤めていた職場に復帰した。外国商
社の秘書である。ぼくもまた別系統の外国商社に勤めているが、ぼくの語学力もあやしいも
のだけれど、戦時中の女学校出で職場だけでおぼえた妻の英語は、ぼくよりもあやしげなのに、
たちまち元どおりの給料がもらえるようになった。もちろんタイプライターだけは自信があっ
て、七十語をたく腕を持つてはいる。なのに、いちおう大学を出て、六つ年上の三十男であ
るぼくが、妻より手取りで五千円も安いサラリーマンなのである。しかし妻はそんな点では現
実的な女だけれど、あるいはそのせいかも知れないが、決してほこらしげな顔を見せたこと
はない。しかも家庭内のことは隅から隅まで片付け、かたわら一日おきに英語の夜学に通って

る。これでは、たとえ彼女が腹の中でぼくを軽蔑していても手も足も出ようはずがない。

妻は、夜学で遅くなるときは、朝出がけに夕食もつくって小型の冷蔵庫に入れ、いつでもぼくが食べられるようにして行く。しかしぼくは、妻が帰るまで、チビリチビリと晩酌をやりながら、夕刊を丹念に読む。二時間もすると、広告の文字までおぼえこむほどである。

夜学から帰った妻は、すぐ割烹着を通勤服の上からつけて、朝つくった料理をあたためられる。その間、ほとんど口らしい口もきかない。しかし別に険悪なわけではない。要するに、ぼくという夫を見限ってから、必要以上のことはしゃべらなくなっただけである。ぼくの方は、もうそろそろ鼻うたでも唄って寢床にもぐりこみたいころだから、食事さえすめば話をするなどおっくうで仕方がないことである。晩酌については、結婚前に、

「からださえこわさなければ、男ですもの、多少は召しあがったっていいわ」

と何度かいわせてあるから、ぼくは安心して、度を過ぎないように慎しみながら、彼女の結婚前の寛大なセリフにもたれかかっている。酒豪の父親を持っているだけに、わかりはいいようだ。

しかし妻は、腹の底では、ぼくと離婚することを真剣に考えているのではなからうか。すでに恋人が出来ているかも知れない。何故なら、週に一度か二度くらいの夫婦のいとなみにも、彼女は万全の策を講じているからだ。薬品を用いたり、何々式という方法で計算したりして、準備が出来ないとまるでサザエのようにからだをまるめこんで、ぼくを寄せつけないのである。

「だって、経済的にもう少し落着くまでは、赤ちゃんが可愛いそりよ」

表向き理由はそうだが、きつと離婚の準備をしているのに違いない。しかし不思議なほど嫉妬をおぼえたことがなく、なるときは仕方がないさ、と思ひこんでいるのだから、他人から「意気地なし奴」

とののしられても抗弁のしようはない。

そのぼくが、会社の日本人従業員のための食堂運営委員に選ばれたとき、真先に笑いだしたのは妻であった。結婚してから彼女が、これほど嬉しそうな、朗らかな笑ひ方をしたことは一度もなかった。

「まあ、あなたがそんなものになって、ほんとにやっけて行けるの？ 食堂がつぶれやしない？ ああ、おかしい」

ほんとにあきれた、選んだ人も選んだ人たちだわ、と笑いこけた。半年前のことである。しかしぼくは腹もたたなかった。妻のいうとおりなのだから。妻にはくわしく話さなかったが、各職場から一名ずつ、「秀」や「優」の男たちが選ばれて二十人の委員が集まった中で、「良」はぼくだけであり、ぼくを選んだのは、人事課でもっとも閑職にあるという理由だったのだ。他の同僚たちは、地方への出張も多いし、仕事が多忙で、食堂の運営にまでは手がまわりかねるから、という含みがある。むろん上司からいいわたされた表向きの口実は、

「君は、毎日お茶をわかしたり、湯呑を洗ったりしてくれている。ほかの誰にも真似の出来ないことだ。君をおいて他に適任者はいない。それにストの時のこともある」
であった。

「ぼくには出来ません」

とぼくは泣きそうなほど真剣に抗弁したが、三日のあいだ、まるでおがむようにいわれて、とうとう陥落してしまった。弱ったな、というのがそのときの実感であった。お茶くみや御飯たきくらいならぼくにだって出来るけれど、運営委員などつとまるとは思えなかった。

お茶くみというのは、一年前、入社したばかりのとき、ぼくと同僚十三人が、交替でみんなの湯呑を洗い茶をくんで配ることになっていたのに、いつの間にか女ばかりが押しつけられてするようになった、と五人の女性が毎朝こぼしているのを聞いたぼくは、入社一週間目に、

「今日はぼくがやりましょう」

と買って出たのが毎日になり、ずるずるとそのまま一年半、ぼくの仕事の完全な一部になってしまった。ついで、ストのとき云々というのは、大船の会社と戸塚にある姉妹会社の組合が合同でストライキをしたとき、人事課の男子社員二十名が、組合員でもないし仕事が多忙だったので、二日三晩泊りこみをしたことがあり、泊りこんだ翌朝、

「味噌汁がのみたい」

「お新香をバリバリかじりてえな」

とまるで一と月も二た月も日本食から遠去かっていたような悲鳴をあげる同僚たちに、ぼくが提案して、二世の人事課長にピケを通過して米や野菜を運びこんでもらい、ぼくがにわか板前になったときのことを指している。罐詰のポテトでつくった味噌汁も、コンビーフと玉葱の即席料理も好評であった。みんなの仕事は捗った。

「君は、コックとしての資格十分だよ。人事課においておくのは惜しいくらいだ」

輕蔑をふくんだ同僚たちの声に、ぼくはただにやにやと笑いかえした。ストが終るまで、ぼくはおさんどんをした。書類の山は、とうとう崩す暇がなかった。しかし書類をひろげるより、五年、六年むかし経験したおさんどん仕事の方が、遙かに楽しかったのは事実である。

以上が、上司がぼくを食堂運営委員に推薦した表向きの理由である。しかし裏の事情などまったく知らない妻は、ぼくみたいな男が晴れがましい運営委員に選出されたとおかしがるのも、無理はなかった。もちろん、十日間にわたって連日ひらかれた食堂運営委員会で、それが定款や就業規則の作成という人事に関する問題が検討されたにもかかわらず、人事課員のぼくがあくまで無能であったことはいうまでもない。

五、六日たつてからのことであつた。妻が、

「ずいぶん熱心ね。あなたが、そんなに物事に熱中できる一面を持っているとは知らなかつたわ。一時間四十円の手当だなんて、煙草代にもならないじゃないの。でも、ちょっと見直したわ。男ぶりも上つたみたい、フフフ。それともあなた、アンナさんと委員会にかこつけて逢引きでもしてるんじゃないの？」

と平然とした顔つきで、そんな嫌味をいった。とたんにぼくは赧い顔をして、これまでだとむきになって否定したのに、そのときはわざと余裕があるふうに笑つてみせたら、いっそう口もとがゆるんで、

「案外そうかも知れないね」

とってしまった。とたんにしつべ返しをくった。

「ふん、しょってるわね。なにさ、その顔。まるでたがのゆるんだザルみたいじゃないの」
ぼくは、

「ザ、ザルとはひでえな」

と口をとがらせてみたのに、かえってげらげら笑い出してしまった。すると妻は急にことをあらためた。

「ごめん遊ばせ。でもいいのよ、アンナさんと仲良くしたって。どうせあなたが全身的に愛した方だそうですから、火がついたのならいつでもおおゆずり致しますわ。わたし嫉妬ジムツなんかおこしませんから」

妻と言い争っては、とても勝ち目などありはしない。

「なんでえ、おんなじことばかり繰り返かえして」

と照れ隠しの捨てゼリフを口にしながら、玄関まで儀礼的に見送る妻の眼に、さもいそいそと映るようにふりかえりもせず出勤した。

2

アンナとしか妻はいわない。決して本名を口にしないのだ。外国名だと、別人のような気がして救われるからかも知れない。ともかく、アンナってどんなタイプの女性？ と尋ねたので、

三原山みたいな女さ、と答えたことがある。妻がげげんな顔をしたので、

「まだ盛んに噴煙を上げていて、うっかり近づくると火傷をするような女さ」

と解説したら、

「へえ、そんな素敵な女性がかつての恋人だったの。羨しいくらいだけど、よくあなたみたいな方を好きになったものね」

と皮肉めかして冷笑を浮かべた。無理もなかった。妻はぼくの怠惰な面しか知らないけれど、アンナは七年前から交際し三年前に婚約したのに、あっさりとはぼくを捨てて他の男に走ったが、その男との同棲にも失敗し、今は独身でカトリックの熱心な信者になり、表面はひそやかに、ぼくと同じ会社の、しかも人事課に働いているのだが、彼女に捨てられるまでのぼくは今より遙かに貧乏だったけれど、生活が多忙で充実していた。

そのころのぼくは怠惰ではなかった。同じ人事課でも部屋が違うので、一日に一、二度顔を合わせるのが関の山である。アンナは、現在のぼくがこれほどまでに怠惰だとは露ほども知らないが、しかし彼女は、ぼくがもっとも頑張り屋だった時代をよく知っている唯一の女性である。ただぼくが、怠惰な男に変わり果てた原因のなかだが、彼女を失ったことによるということを彼女は知らないし、誰にもさとられたくはない。しかし彼女は、ぼくの本性を見破ったからこそ、破れ靴のようにぼくを捨て去ったのかも知れない。一般常識からいえば裏切りかも知れないが、ぼくはまだ一度も裏切られたとは思っていない。しかしぼくの心の奥には、まだ残り火が燐光を放っている。

今の会社に入社したのは妻は偶然だと思っているが、実はアンナへの思慕を押えきることが出来ず、結婚半年の妻と別れるつもりで、しかし別の用事にかこつけて、彼女の家を訪れたのがキッカで今の会社到手引され、簡単な入社試験の結果、運よく人事課におさまることが出来たのである。同時に、駐留軍通訳という前職を退いた。前職の方がはるかに高級だったけれど、ぼくにとつて問題ではなかった。

「人事課って、うるさいところよ。だからわたし、あなたが入社しても、赤の他人のような顔してるけど、悪く思わないでね」

つまらんな、せっかく彼女のいる会社へ入社したのに、と思っただけれど、黙ってうなずくしかなかった。ぼくはアンナに対して、それまであまりにも従順であり過ぎた。別に意識的なのではない。おのずから、

「い、いよ」

といってしまうのである。あとで悔やんでも、顔を合わせると同じことをくりかえす。まるで彼女の操り人形であった。だからこそ、

「別れてほしいの。理由は、あなたが嫌になつたからよ」

といわれたときも、表面的にはあっさり別れることが出来たのだ。

アンナというのは洗礼名で、本名は須藤圭子。妻よりひとつ年下。だから知り合ったときは彼女は十七歳の秋で、お河童頭をしていた。勤め先で知り合ったのである。お互いに勤務先は違っていたが、ある日、彼女がぼくのオフィスへタイプライターを借りにきた。彼女のタイプ